

E.F.Aの技師たち

ルーピンス氏の感想をそえて



Erik Floor & Associates 略して E. F. A——昨年5月公団と技術協定を締結したこの E. F. A は、シカゴに本社をおく技術スタッフ約40名の技術会社である。ルーピンス総支配人以下11名の技師が日本に派遣されて、現に愛知用水事業の主要工事に関する設計・施工監督などの各種の役務に従事しつつある。アイチ・プロジェクトを「なかだち」とする日米技術の協力ないし交流からもたらされるものは、色々の意味で興味深く、また彼等の技術者がそこから学んでくるものも多いように見受けられるが、下に掲げるルーピンス総支配人の感想もその1つであろう。同氏の一文は編纂者の意図からはややそれているが、これはこれなりにいくつかの示唆を含んでいるように思われる。

在日 E. F. A の主要メンバー、右からルーピンス総支配人、ヘル、リフナー、デヴィッドソンの各技師

愛知用水計画に対して、われわれ日米両国の技術者が協力を始めてからすでに2年を経た。この2年間にわれわれは多くのものを見、多くのものを学ぶことができた。異った背景をもつ民族間の共同作業においては、誤解ないしそれに基づくトラブルの発生は、残念ながらこれを絶無にすることはできない。しかし、われわれは背景の相違を理解ある眼でながめることによって、事態の好転を期待することができるであろう。

相違点の多くは、幾世紀にわたる民族の文化と理想の所産に深く根差しているのであるが、しかしこれは学者たちがその書齋において考察すべき問題であろう。われわれはもっと散文的に、そして土木技術的な見地からこれをみなければならぬ。

相違点はいろいろあるが、その中でももっとも鋭い相違点は2つあると思われる。

その第1は、日米両国における典型的なかんがい事業計画の性格というものが全く異っていることである。

第2は、用地取得の問題である。とくにこの用地の問題によって、技術的諸問題に対する取組み方が変わってくるという点は、全くわれわれの想像もできない特異な事実であったことを告白しなければならない。

問題の焦点を見失わないために、われわれはこの2つの相違点を語る前に、まずいくつかの類似点の方を強調した方がよいと思う。

私たちは技術者として同じように、自然の根本法則について必要な訓練を受けてきている。したがって言語という大きな障壁があるにもかかわらず、日米の技術者は協

力して、もっとも安い原価で、最終需要家(農民)の負担が最小であるように、しかも事業としても経済的に成功しうよう各種の工事の完成をめざしている。これらの技術者としての念願は双方に共通しているのである。

私たちはすでに予備報告 (Preliminary Report) を研究していた頃から、この事業いや日本におけるあらゆるかんがい事業が、施行地域の密集した人口と複雑な地形のゆえに、多様かつ困難な問題を生起するであろうことを予想していたのである。

次に相違点について述べよう。もちろん、かんがいの目的というものは、いずれの国においても変ることはない。しかしアメリカにおける主要なかんがい事業は、降雨量が日本などと比較にならぬほど僅少であるため、商品化できる農作物の栽培がほとんど望み得ないというところに、その発達の契機をもっているのである。事業はかんがい用水がなければ全然無価値な乾燥地帯に行われるが、大部分広大で平坦な谷である。また勾配をつけることもさして重要な問題ではない。

降雨は一般に少いが、特定地域にはしばしば短期間に大きな降雨がある。しかし排水の問題は小さく、水路をかん排両用に使用することはごくまれである。

アメリカでかんがい土木事業を新規に行う場合に楽なことは、日本におけるように交渉しなければならぬ数多くの政治団体がなく、また郡、町、村のような政治的区画もないことである。事実多くの場合、開発された土地は連邦政府が所有している。もっとも土地が政府所有だからといって、トラブルが全くないわけではない。例えばかんがい区域、国立公園地区、インディアン指定保留地等の間には、利害関係の対立がみられる。しかしその問題は次のような経過で解決されている。

アメリカでは、かんがい開発事業は全体として、地方の利害関係に妨げられることなく計画されるべきだと考えられている。というのは、多くの場合、地方の利害関係というものは今なお発展の途上にあり、たがって、い

(以下次頁へ)